

今週の為替相場見通し (2019年7月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.54 ~ 108.64	108.48	107.80 ~ 109.50
ユーロ	(ドル)		1.1208 ~ 1.1371	1.1226	1.1100 ~ 1.1350
(ユーロ=)	(円)		121.32 ~ 123.34	121.81	120.00 ~ 123.00
英ポンド	(ドル)		1.2481 ~ 1.2708	1.2535	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	135.18 ~ 137.79	135.86	133.00 ~ 137.00
豪ドル	(ドル)		0.6956 ~ 0.7048	0.6978	0.6900 ~ 0.7040
(1豪ドル=)	(円)	*	75.13 ~ 76.29	75.71	74.50 ~ 77.00

(データ) 先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替市場第一チーム 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 107.80 ~ 109.50 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

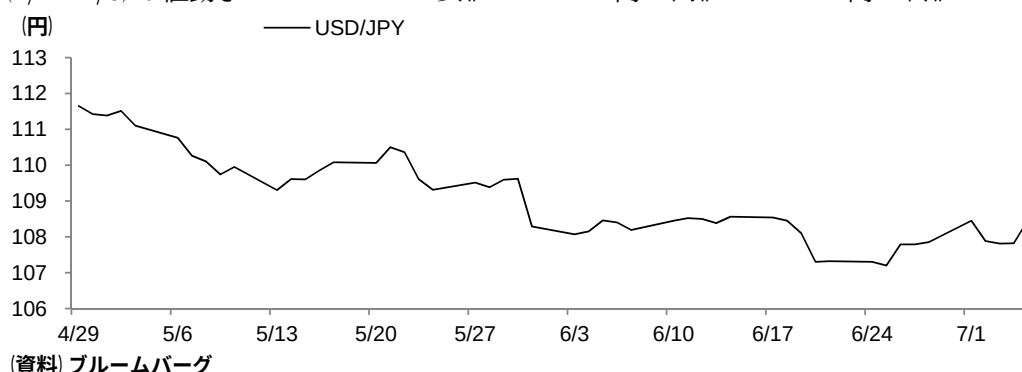
先週のドル/円相場は、下に往って来いの展開。米中首脳会談明けの週初1日、米中通商協議の再開合意、対中関税第四弾の先送り、およびファーウェイ制裁の一部緩和が好感され前週末クローズから窓を開けてオープンしたドル/円は、一時108.53円まで上昇。翌2日アジア時間早朝、米USTRがEU製品40億ドル相当へ追加関税を提案したと報道を受け108.40円台から108.30円割れまで下落もフォロースルーなく小動き。しかし海外時間、ハト派なBOEを受けたポンド/円の売りに加え、米金利の低下やプーチン露大統領が露国防相と緊急会談の報道にリスクオフムードが強まったことも相まって108円を割り込むと、3日にかけても米金利が低下幅を広げる展開に一時週安値となる107.54円をつけた。その後、米株が堅調に推移すると107円台後半まで反発する場面も見られたが、米6月ISM非製造業景気指数の悪化に再びドル売りが強まり小幅に下落。米休場明けの5日、注目された米6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が市場予想を大幅に上回り、平均時給こそ予想を下回ったものの、米金利が上げ幅を広げる展開にドル買いが強まり、それまでの週高値を上抜け108.60円超えまで上昇。「トランプ大統領が利下げを改めて要求」とのヘッドラインに反落する場面も見られたものの下値は限定的で、週高値となる108.64円をつけ、108.48円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い展開を予想。G20を受けた週初の金利上昇も短命で、ECBやBOEもハト派姿勢を強める中、グローバルな金利低下、株高のコンセンサストレードが続いていたが、週末の雇用統計が予想を上回る結果となり米金利は大幅上昇。これを受けドル/円も週初にレジスタンスとなった108.50円レベルを明確に上抜け高値を更新する動きとなった。今週は、10、11日のパウエルFRB議長の議会証言が注目される。市場は7月の利下げを100%織り込んでいるが、6月FOMCでこの見方は既に容認されており、議会証言のもととなる金融政策報告書でも「適切な行動をとる」と6月FOMC声明の内容が繰り返して強調された。もっとも、今後の利下げパスについて明確な方向性を示す可能性は低く、一段の金利低下イベントとはなりづらいか。雇用統計を受け7月50bpの利下げ観測は後退し、過去最高値を更新していた米株の調整も限定的であり、ドル/円は目先底堅い動きとなりやすいだろう。200日移動平均を挟んで小動きだったDXYは米雇用統計を経て大幅上昇しドル安に一服感が出ていることに加え、5月以降の下落で短期勢のポジションは依然ショートに傾いていることも考えれば、短期的には先週末のドル高地合いが継続しよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週 (7/1~7/5) の値動き:

安値 107.54 円 高値 108.64 円 終値 108.48 円



2. ユーロ

為替営業第二チーム 森谷 友一

(1) 今週の予想レンジ: 1.1100 ~ 1.1350 120.00 ~ 123.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は下落する展開。週初1日に対ドルで1.13 台後半、対円では123.00円でオープン。対ドルでは、一時週高値となる1.1371をつけるも、米金利上昇を受けたドル買戻しの動きに1.12 台後半まで下落。対円でも米中通商協議の再開を受けリスク回避の動きが後退する中、一時週高値となる123.34円をつけたものの、その後はじり安推移となり122円台前半まで下落した。2日はECB 政策担当者の「7月に急いで利下げする必要がないと見ている」との発言が報じられると対ドルで1.13 台前半まで反発したが、ECBの次期総裁にハト派と見られるラガルドIMF 専務理事が浮上との報道に1.13 付近まで反落。対円では米金利低下を受けのドル/円の軟調推移を受け121円台前半まで値を下げる展開となった。3日は独10年債利回りが過去最低水準まで低下したことに対ドルで1.12台後半まで下落し、対円では一時週安値となる121.32円をつけた。その後トランプ米大統領が、欧州が為替操作を行っているとは非難したことを受けてユーロ買いが強まるとドルは1.13 台前半まで反発したものの、直ぐに1.12 台後半に売り戻された。4日はNY 休場となる中で特段材料に乏しく対ドルで1.12 台後半、対円では121円台での小動き。5日は独6月鉱工業生産が市場予想を大きく下回りユーロ売りが強まったことに加え、米6月雇用統計の良好な結果を受けドル全面高となると対ドルで一時週安値となる1.1208まで下落。一方、対円では米6月雇用統計後のドル/円の上昇に連れて121円台後半に上昇。対ドルで1.12台前半、対円では121円台後半で越週した。

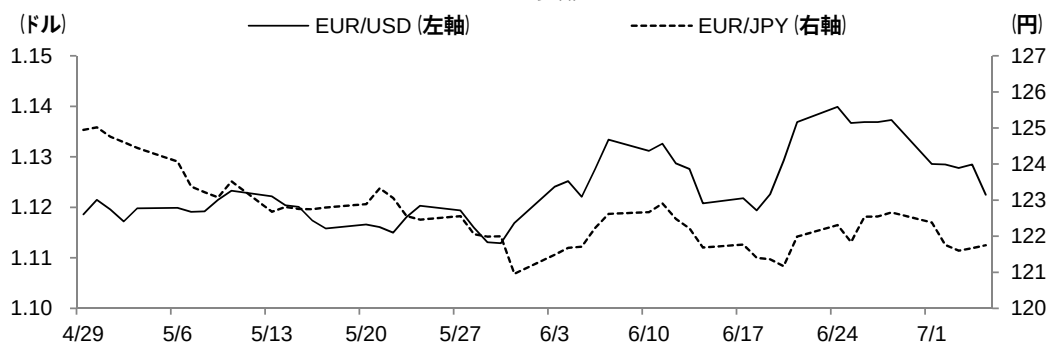
今週のユーロ相場は上値の重い推移を予想する。ECBの金融政策については先月18日のECBフォーラムにおいてドラギECB総裁が「追加緩和は依然として政策ツールの一部」等のハト派発言をしたことで、市場では緩和期待が高まっている状況。今週は10日(水)に欧州委員会の夏季経済予測が発表されるが、足許の冴えないユーロ圏の経済指標を踏まえると下方修正される可能性が高そうであり、その場合には改めて緩和が必要な状況であることを印象付ける材料となり得るだろう。一方、ドル相場については今月末のFOMCにおける利下げ観測が高まっているものの、FED高官の発言や先週発表された米6月雇用統計の良好な結果を受け大幅利下げ観測は後退している状況。ドルは買戻しが進みやすくユーロ相場の上値を押さえる要因となりそう。今週は10日、11日にパウエルFRB議長による議会証言が予定されている。7月利下げの可能性を排除する内容となることは想定しづらいが、米国経済については必ずしも弱い指標が続いているわけではなく、初回利下げ以降の追加利下げを織り込ませる発言は飛び出さない可能性が高いと考えており、ドルを大きく押し下げる材料とはならないと予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1208 高値 1.1371 終値 1.1226

(対円) 安値 121.32 高値 123.34 終値 121.81



(資料) ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 北原 亘

(1) 今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 133.00 ~ 137.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、英経済指標の下振れ、およびドル主導の動きによって、主要通貨に対して全面安となった。週初1日、英ポンドは1.2695でオープン。前月末のG20サミットでは、トランプ米大統領と習近平中国国家主席が首脳会談を実施。「第4弾の対中追加関税発動を見送り」、「ファーウェイに対する禁輸措置の緩和方針を表明」、「通商協議の再開を合意」したことを受けてドル全面高で始めると、英ポンドも売りが先行。英6月製造業PMIは48.0と市場予想49.5を下回り、英ポンドの重石となった。翌2日、英6月建設業PMIは43.1と市場予想49.2を大幅に下振れ、英ポンドを押し下げた。午後に、カーニー英中銀総裁が、米中貿易摩擦や保護主義の台頭が英国経済にもたらす悪影響、景気の下振れリスクに言及すると、英ポンドは一段安となった。翌3日は、英6月サービス業PMIは市場予想51.0に対して50.2、英6月総合PMIは市場予想51.0に対して49.7とそれぞれ下振れ、総合PMIは景気拡大・縮小の節目となる50を割れた。直後、英金利は低下で反応するも、英ポンドの値動きは限定的だった。翌4日は、米独立記念日で市場参加者の少ない中、英ポンドは1.25台後半の狭いレンジで終日推移。翌5日、英首相有力候補のジョンソン前英外相が「合意なき離脱の準備を加速させる」と発言、英ポンドは1.25台前半へ下落。その後、米6月雇用統計は、市場予想対比で強い結果となり、大崩れとなった前月からの反発を確認し、一旦は米景気減速への警戒感が後退、ドルには買い戻しの動き。英ポンドは1.25割れまで下値を切り下げ、週の取引を終えた。

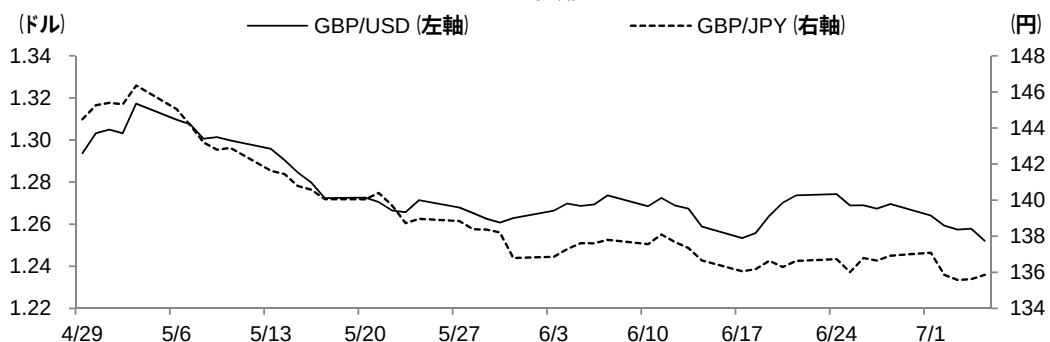
今週の英ポンド相場は、上値が重く、一段安を試す展開を予想する。足元で英ポンド相場を動かしているのは欧米金融政策・経済指標である。今週10・11日にはパウエルFRB議長の議会証言が予定されているほか、10日には6月FOMCの議事要旨が公表される。6月FOMCではメンバーの半数、さらにはパウエルFRB議長が年内の利下げを予想していることが示唆され、ドル全面安となった。前回FOMC後の高官発言等から察するに、年内利下げへの支持者はパウエルFRB議長を含む理事5名とウィリアムズNY連銀総裁、ブラッド・セントルイス連銀総裁、カシュカリ・ミネアポリス連銀総裁の8名だろうか。直近ではメスター・クリーブランド連銀総裁や、カプラン・ダラス連銀総裁など、利下げへの不支持を表明しているメンバーもあり、それぞれのスタンスとトーンを確認する機会となる。FRBは7月に市場予想通り25bpの利下げを実施し、6月FOMCと同様に巧妙に時間を買った。経過を見守っていくと予想するが、市場での米利下げは既に十分に織り込まれており、次第にドルの買い戻し、英ポンドの下落が見られるだろう。ブレグジットに関しては、英保守党党首選の行方に注目が集まっており、ジョンソン前外相とハント外相の一騎打ちとなっている。今週9日に予定されているテレビ討論会では、あらためて両者のスタンスと人柄を確かめることになる。EUとの交渉に関しては、両候補ともにバックストップ案を含まない合意を目指すとおり似通っているほか、新党首の発表は7月23日までされないため、英ポンドへの影響は限定的となると考える。英経済指標では10日(水)に5月鉱工業生産・製造業生産が発表される。英中銀は金融政策の様子見姿勢を強めており、経済指標が英ポンドの方向感に大きく影響を及ぼすことは期待できないだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2481 高値 1.2708 終値 1.2535

(対円) 安値 135.18 高値 137.79 終値 135.86



(資料) ブルームバーク

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6900 ~ 0.7040 74.50 ~ 77.00 円

(2) ポイント [先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は0.70を挟んでもみ合いの展開となった。週初1日(月)、週末行われた米中首脳会談にて貿易協議の再開、対中追加関税の延期等が決定されたことを好感し、豪ドルは前週末から大きく上昇し0.703台をつけたが、中国の6月製造業PMIが市場予想を下回り、株式市場の上昇も一服となったことを受け売りに押される展開。さらに米6月ISM製造業指数が市場予想を上回りドル買い圧力が高まる中、週安値となる0.6956まで下落した。対円でも週高値となる76.29円をつけ、その後反落した。2日(火)はRBA理事会において25bpの利下げを決定したことで発表直後0.695台まで急落したものの、声明文において今後の政策調整について「必要であれば」との文言が追加されたことが今後の追加利下げの可能性が低下したと受け止められ、すぐに買い戻される展開。その後もじりじり上昇を続けた。3日(水)は米金利が低下する中、米6月ADP雇用統計や米6月ISM非製造業指数が市場予想を下回ったことで米利下げ観測が高まり、株式市場の上昇に連れて0.703台まで上昇した。4日(木)は豪5月小売売上高において前回分がマイナス値から増加に改定されたことで一時週高値となる0.7048をつける場面があったが、すぐに売りに押され、その後は米国休日の中、米雇用統計を控え0.70台前半で狭いレンジでの推移となった。5日(金)は米6月雇用統計において非農業部門と民間部門の雇用者数や労働参加率が市場予想を上回る結果となり、米金利上昇とともにドル買い優勢となり0.695台まで急落。そのまま0.69台後半で越えた。

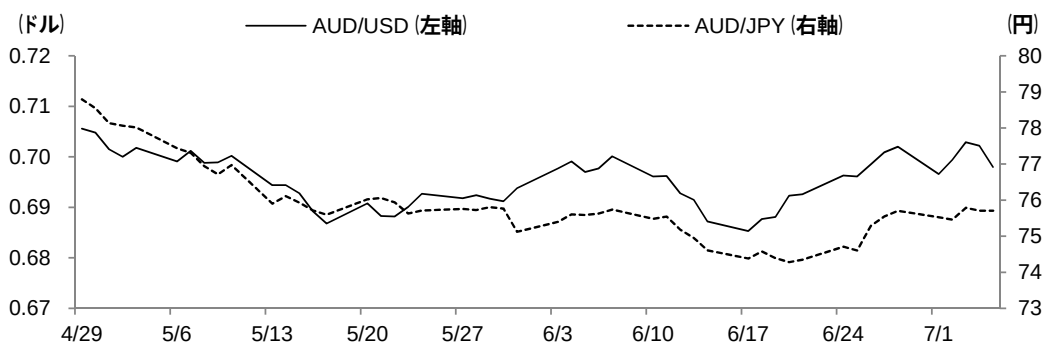
今週の豪ドル相場は上値重い展開を予想する。先週2日のRBA理事会において2回連続となる25bpの利下げが決定され、政策金利は過去最低となった。一方、米国については5日(金)に発表された米6月雇用統計が市場予想を上回る強い結果となったことで、利下げ観測が後退している。ただ、豪州については利下げは既に織り込まれたほか、今後の利下げについてもRBAが慎重との見方が広がっているため、今週のパウエルFRB議長の発言等により再び7月FOMCでの利下げ観測が高まれば豪ドルのサポートとなるであろう。今週は8日(月)に豪6月求人広告件数、9日(火)に豪6月企業景況感・雇用指数、11日(木)にデベルRBA副総裁の発言が予定されている。先週のRBA声明文を受けて、上述の通り追加の利下げ観測は若干後退している。またロウRBA総裁は先月金融政策の限界に言及しており、今後は金融政策だけでなく財政政策で経済を支えていく可能性もある。かかる状況下、指標の結果及び、デベル副総裁の発言を受けて更なる利下げがあるのか見極める段階となると思われる。また米国では10日(水)・11日(木)にパウエル議長の議会証言、10日(水)にFOMC議事要旨の公表等が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6956 高値 0.7048 終値 0.6978

(対円) 安値 75.13 高値 76.29 終値 75.71



(資料) ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。